

「陶陶と」

今回の二人展において、皆さまには陶の可能性を感じて頂きたいです。

二人とも出身校は異なりますが、70年代ごろに隆盛したオブジェやきの影響を強く受けているという共通点があります。自由気ままでありながらも力強い造形である陶による立体は、当時の日本に大きな印象を与えました。その造形表現は素材や形、技法が複雑化していき、見る人や時期によってイメージされるものが変容していくことに私たちは興味を持ちます。その作品群やムーヴメントは、現代の立体陶芸に従事する私たちの重要な基盤になっていると感じています。

米山は手捻り技法をとおすことで、独特のフォルムと柔らかな輪郭線をうみだします。この技法は陶芸技法の中でも、土に直にふれ成形していく手法のため、作者の身体性や感覚が重視されます。身体を通して捻り出された米山の实像は、作者から濾されたひとつの分身であるともいえます。

対して高良は陶技法だけでなく、ジオラマのパーツなどを用いて複合的に表現を完成させていきます。それは陶素材を用いて表現するという点に関連し想起される事柄に、自身の見たことのある夢や空想を落書きのように立体化していきます。

私たちにとって日々の生活の中で生まれる作品は、自身の感覚や感情を取り留めておくための坩堝です。まさに今、この時代に生きている私たちそのものが、直接取り込まれていて、陶としてそこに存在しています。

私たちの作品が、他者にどう映るのか興味があります。自由に気ままに、そして意思を持って生み出された私たちの作品が、今回の展覧会で鑑賞された方々の日常とリンクすることで、また新たなカタチへと変貌していく可能性にとっても胸が踊ります。

タイトルである「陶陶と(ようようと)」は、「なごやかに楽しいさま」という意味があります。その変容していく様子を、私たちは楽しみたいです。

私たち二人の共通点や異なった部分を感じてもらいながら、陶と触れ合う機会として頂ければ幸いです。